

## Middlemarch

## Ⅱ. Lydgate の人生における理想の挫折について(3)

嶋 田 貴美子

(前号からの続き 9)

Bulstrode のかつての妻、つまり Dunkirk 氏の未亡人が、娘はもう死んでしまっているに違いないという Bulstrode の言葉を信じて娘の搜索をあきらめ遺産の分与の手続きをしなかった以上、たとえその娘に係累があったとしても Bulstrode はその誰であろうと財産を分け与える法律上の義務はない。しかし Bulstrode は身をさいなむ恐怖の中にも良心がわずかに感じられるようになると、次のように考え始める。

どうやったら心の平和と神の信頼を取り戻すことができるのであろうか—どんな犠牲を払ったら神のむちをおしとどめることができるか。もし自らすすんで何か正しいことを行なったなら、神はその間違っただけの報いから彼を救い出してくれるかもしれない。<sup>(1)</sup>

それで Bulstrode は、Dunkirk 氏のその娘の息子が Will Ladislaw であることを知るや、Will に法外な額の自分の現在持てる財産の分与を申し出たのであった。貧しいジプシー同然の Will の身を思えば、そのことが Will を救い、それも温情のある法外な額を差し出したことで神にも申し開きが立ち、自分の過去の過ちに与えられるべき神のむちをのがれ、さらに自分の持てるいわくつきのその金も浄化されるという Bulstrode 特有の思考パターンから出た善行であった。

しかし Will は、Bulstrode が、義理の娘である自分の母親の生前の居所を知っていながら、財産の分与をしなかった Bulstrode の罪と、またさらに Bulstrode が持てるその財産が盗んで集められたものを売る質屋の商いによって作られた汚れたものであるという二つの事実がわかって、Bulstrode によって差し出されたその金がいかに不浄なものであるかを感じると、敬愛する Dorothea と自分との間に汚点が残ることを恐れて、Bulstrode のその申し出を拒絶したのである。Bulstrode は Ruffles を通じてふり下される神の鞭である身辺からの屈辱のまず最初のものを Will によって与えられたのであった。Middlemarch を去る決意をますます深めていたところに、当学紀要前号の筆者の論文 *Middlemarch* 8 で述べたとおり、Ruffles は重症のアルコール中毒症状により、<sup>(2)</sup> 極度の体の衰弱と意識混濁の状態で、Bulstrode の別邸 Stone Court に Garth 氏によって運ばれてきたのである。

そして Bulstrode はこの Garth 氏によって Will に続いて第二の神の鞭を与えられるのであった。つまり Garth 氏は Ruffles を自分の馬車に乗せ Stone Court に運ぶまでの間、Ruffles から Bulstrode の恥辱の過去の一切をきいていた。*Middlemarch* に登場する者の中で

はもっとも人の中傷をすることを嫌い、口の固い正直者の一人である Garth 氏であるから、そのことを他に口外することはないという確証は得たが Bulstrode の「私はあのならず者の被害者なのです」という言葉に対して、温厚な Garth 氏の道德意識は次のような言葉となって Bulstrode に向けられる。

「ちょっと待ってください。あなたは、自分が彼の悪徳によって利益を得ていたとき、彼をますます悪くさせる手伝いをしなかったかどうかよく考えてみなければなりません。」  
(3)

しかし Bulstrode はそれでもなお、次の三つのことで「神がより悪い結果から彼を救おうとしている前兆のようなもの」を感じ始める。  
(3)

その一番重なことがらは、Ruffles を Stone Court に運んだのが他ならぬ Garth 氏であったということであり、秘密が暴かれないままにいることはほぼ確実であったのだ。第二番目は、Ruffles が運ばれたのが家族に知られる恐れがない Stone Court であったということ、それから第三番目は、Ruffles がひどく病に苦しんでいるということであった。特に第三番の事から、恥辱をこうむる危険性が全くなくなることで、つまり「神のみこころが行なわれ」  
(3) Ruffles に死を決定する力が及ぶことを信じようとした。そして現実(3)に神のみこころがそのような形で行なわれるとすれば、Bulstrode は無理に Middlemarch を去る必要はないのである。去るとしてもほんの短い間のことであろう。とすれば Bulstrode はその前日 Lydgate に対して、病院の運営法を大巾に変えることを伝えたことと、Lydgate の個人的な要望であった一千ポンドの借入を拒否したことによって、悪化した Lydgate との関係を早急に修復する必要があったのである。「彼 (Lydgate) と和解したいというよりは、彼の中に個人的な強い恩義の意識を持たせたい」と Bulstrode は思う。

そうすれば不愉快な疑いをかけられたり、Ruffles のうわごとから何かを知ったとき、・・・

Lydgate の心に自分を守る防波堤を築くことができるような気がした  
(4) のだ。そして次の日 Lydgate が Ruffles の往診に来たとき、Bulstrode は Lydgate に一千ポンドの小切手を振り出すのである。ちょうどその前日 Lydgate の家の差し押さえが始まって、妻の Rosamond が床に伏せるほどの屈辱を味わっている姿に、Lydgate は初めて Rosamond に夫としての謝罪の涙を流したのであった。その矢先のことで、Bulstrode が目の前の患者 Ruffles によって追いつめられていることを全く知らない Lydgate は、その金を心底ありがたく受け取ったのは言うまでもない。

Bulstrode は Ruffles の死を願いつつ、Lydgate の指図を何も知らせないまま、家政婦に Ruffles の看護を任せ彼女の気のおもむくままに、Lydgate が強く禁止したことまで容認して、看護させたのであった。Ruffles は急変し、翌朝 Lydgate が往診に訪れている間に死を迎える。Bulstrode は次のような感慨に浸るのである。

彼はそこにすわって彼の平安を破壊しようとしている敵が二度とよみがえることなく沈黙におちていくのをじっと見つめていたとき、ここ何か月かの間味わえなかった安らぎを身にしみて感じた。彼の良心は、彼を救うために天から使わされた天使がまさにするように、秘密をおおいかくす翼によって慰められたのであった。  
(4)

Lydgate は確かに Ruffles の死を不審に思いはしたものの Bulstrode にそれを問いただすことができず、自分の診断の誤りであったかもしれないと思うことでこの件を簡単に終結させてしまったのである。自分の患者に対する医学的立場を重要視する Lydgate が、Ruffles の死をこのように軽々しく扱ったのは、前日 Bulstrode から借りた一千ポンドへの負い目が強く彼の心に作用していたためであった。このような Bulstrode 氏への負い目が Bulstrode と共同で仕事をしていた Lydgate の前途に及ぼす影響を Farebrother 牧師はかねがね心配し、そして現実にも忠告もしてきたのである。当論文の 9 の部分でもみてきたように、Lydgate 自身も Bulstrode との間に個人的な負い目を持つ関係を、それこそ避けなければならないことであると、かつては最も強く決意していたのであった。Lydgate はその金が Rosamond との二人の家庭を救い、彼らを危機から解き放ってくれ、やっと自他共への冷静な判断が可能になるにつれ次第に、Bulstrode が一たん自分に対して極めて冷淡にも貸すことを拒否した金を、まもなく情深い態度で用立ててくれたその行為の裏には、Bulstrode の利己的な動機が何かあるのではないかと疑い始めるようになった。その疑いと再びほのめかされた Farebrother 牧師の、金銭が持たらしめた Lydgate の Bulstrode への負い目への心配は、Ruffles が Bulstrode に対してどんな意味を持った人物であったかということを Lydgate 自身知るようになって初めて、Lydgate の目にはっきりした姿を露呈し始める。

Bulstrode は Ruffles の死後しばらくの間、

神の摂理が彼の前半生の神出鬼没の亡霊から・・・彼を解放してくれたのだと信じていた。そうだ摂理なのだ。彼はまだ、こうなった結果に対して、何かたくらんだとは自分自身に対しても白状してはいなかった。彼は差し出されたようにみえたものをただ受けとっただけであった。彼が、その男の魂がこの世を去るのを早めるようなことを何かしたということを証明することは不可能であった。<sup>(4)</sup>

ところが Middlemarch の住民 Bambridge 氏が旅行から帰って来て、Ruffles が Bulstrode の下で死んだことを知るや状況は一変する。Bambridge 氏は、旅先で Ruffles と会い Will Ladislaw の生いたちも含めた Bulstrode の過去を Ruffles からきいていた。Bambridge 氏が七人の聞き手を前にして話した Bulstrode と Will Ladislaw の噂は、「局所的に色合いがつけられ、諸事情がつけ加えられて」たちまち Middlemarch 中に広がっていった。Ruffles の死に際して Lydgate が立ち合ったことを知ると、Middlemarch の人々は Lydgate が<sup>(5)</sup>

突然大金を自由に使えるようになったことと、Bulstrode が Ruffles が伝えるその醜聞を是が非でものみ消そうとしていたこととの間には重大な関係があるということを<sup>(5)</sup>早くも見てとったのである。

## 10

Lydgate は何も知らない間に Bulstrode と共に Middlemarchers の gossip のうず中にいたのである。Lydgate は理想の追求どころか医者として営業していくことすら覚束なくなってしまう。Lydgate がこのような絶対絶命のピンチに立たされたのは Lydgate の必然的な運命だったのであろうか。Lydgate が Bulstrode から一千ポンドもの大金を借りたということは、先にも

みたように、当座の Lydgate と Rosamond の生活の窮状を救うためには避けることのできなかった必然と考えられないこともない。しかし、実際にそれ以外にその窮状を救う道の選択の余地がなかったかどうかということについては、極めて疑問が残るところである。George Eliot は Thomas Hardy ほどには運命論者ではない。*Adam Bede* 中の Hetty と Arthur の恋についても、*Mill on the Floss* の Maggie と Stephen の禁断の恋<sup>(7)</sup>についても度重なる偶然<sup>(6)</sup>や必然が彼らを出会わせ、そして恋に向かわせはするが、それでもそこにはわずかながら選択の余地があるのであり、あえて彼らの運命といえ、それはその行為を選びとる彼らの性格の中にこそあるのである。そして Lydgate の場合、その gossip が Bulstrode と同列に並ぶ scandal にまで発展した屈辱にさらされざるをえなくなった時、現実には Dorothea から差し出された金で Bulstrode からの借金を全額返済し、Bulstrode の scandal からの潔白の証をたてたばかりか、そして結果的には、とうとう世俗の富とは隔絶した理想的人生を歩むことをあきらめて、かつては住むところとしては不本意に思っていた London に居を構え、金持の患者を相手にする富んだ開業医となり妻 Rosamond の世俗的な欲望を満たす夫となったのであって、そうであるならば、Bulstrode に借金することを免れる道は上記からもわかるように少なくとも二つはあったはずである。それにもかかわらず、自分自身でも、それだけは避けなければいけないと思っていた行為に向かってしまったのは、まず第一には、高遠なる自分の理想の遂行と世俗的観念の強い Rosamond との結婚生活がいくらかずつでもお互いの譲歩によってあくまで両立できると信じる世間知らずの傲慢な性格と、その根本にある、社会の一構成員として生きていく上での金銭感覚の乏しさであり、第二には、自分の理想を構成する根本的な精神と相反する考え方の Rosamond を安易な動機から妻に選び、また一千ポンドもの大金を人に貸す場合の Bulstrode の影響力を洞察できなかったことからわかるように、現象面を重視する科学的な目しか持ちえない、人を洞察する力の弱さによるものである。したがって彼のこの運命は、彼の内に内在するこれら二つの弱点によって導かれたものであるといわなければならないであろう。

そしてこの時点でもう一つ注目すべき点は、Middlemarch における gossip の力の大きさである。Bulstrode は、以前からもったいぶった宗教的態度や偽善的な行いによって何かと町の人々の中において gossip がささやかれてはいたが、Lydgate が町に到来し、Bulstrode と協調関係ができるや Bulstrode の持つ金の権力に反対する勢力は、その gossip の矛先を Lydgate にも向けるようになったのであった。それでもこれまでは Middlemarch の人々は Bulstrode の慈善事業の恩恵を一応は受けてきたのであり、Bulstrode そして Lydgate の gossip の根拠は、観念的なもの、つまり Bulstrode 個人の言動に対する嫌悪感、Lydgate の横柄さへの嫌悪感と学問的水準の高さへの嫉妬などにむけられたものであって、そういう gossip の力それ自体はそれほど恐ろしい力を発揮するものではなかった。それが Ruffles によって Bulstrode の恥辱の過去が明かにされ、Lydgate の立ち合いの下で Ruffles が死を迎えたこと、それと時を同じくして Lydgate が Bulstrode から大金を借りた事実を知るや、gossip 好きの Middlemarchers は、彼らのその趣向に火をつけたのである。そしてたちまちのうちに町中に広がった gossip は

Bulstrode と Lydgate の両方を弾劾し、二人とも町を去ることになるのである。

George Eliot が地域の人々の間の gossip を重要視するこの特徴は、Joan Bennet が言っているように、George Eliot の小説が共通して内部集団 (inner circle)、つまり道徳的ジレンマに陥った少数の人々の集団とそれをりまく外界 (outer circle)、つまりそのジレンマがそこで解決されるべき社会に視点が集中されているからであって、inner circle が outer circle にどんな受けとめ方をされているかということが小説の構成上重要なポイントになるからである。こうした gossip の取り扱い方は、George Eliot の最初の小説 *Scenes of Clerical Life* 中の第一作目、*The Sad Fortunes of the Reverend Amos Barton* の中においてすでにみられ、主人公の Amos Barton の人物描写は、その story の舞台である Shepperton 村の裕福な家庭、Cross Farm (クロス農場) での噂話によって行なわれる。このような噂話の中で人を描写する方法は、次の作品 *Adam Bede* の中においても、その小説の heroine ともいえるべき Dinah Morris の最初の登場が大工である Adam の仕事場での彼の仕事仲間による噂話として成され、また *Felix Holt* では主人公 Felix は、Felix の母親と牧師 Lion 氏との噂話の中で読者にあらかじめの主人公についての予備知識が与えられ、そしてまた当紀要ですでにみてきたとおり *Middlemarch* の主人公 Lydgate もまずは Dorothea の婚約披露パーティーの席での *Middlemarch* の人々の噂話の中で初めて紹介されるというように、George Eliot のどの小説にも多かれ少なかれ見られる小説構成上の一つの大きな特徴となっている。

この特徴は、当学紀要20号の *Middlemarch* の論文の中でテーマのとり方の類似性を指摘した Shakespeare 劇 *Othello* において、主人公 Othello が第一幕第一場の冒頭における Iago と Roderigo との噂話の中で人物描写がなされそれが劇に方向性を与えていることや、*Macbeth* においてはこれも劇が始まるやまっ先に登場する魔女たちの噂話の中で主人公 Macbeth の運命が予言され、また *Antony and Cleopatra* においても第一幕第一話でまず登場する Antony の部下二人の噂話の中で Antony の現在の状況が語られるというような Shakespeare の劇作の構成方法と極めて類似したものであって、もちろん Shakespeare 劇のように第一幕第一場に story の最初と終りがあるほどの重たい役割は負わせてはいないけれども、*Middlemarch* の中にも二、三の Shakespeare 劇の中の登場人物の引用があることからもうかがわれるように、Shakespeare 劇の構成法からの影響を多かれ少なかれ受けたものであるといえよう。

作品の中において gossip に一つの役割を課す作品製作上の構成法は類似しているとしても、その gossip の役割に対する認識については、Shakespeare と George Eliot とでは全く異なっている。つまり先に例としてあげた *Othello* において Iago のふりまく gossip は Othello の運命そのものを暗示するものであり、また *Macbeth* においても *Antony and Cleopatra* においてもそこに現われた gossip は、すなわち彼ら主人公の運命の暗示であるが、この章の最初で述べたように運命論者ではない George Eliot が小説の中に描く gossip は、Joan Bennet のいう inner circle と対峙すべき outer circle の観念的な現象としてあるのである。そのためその gossip は生き生きとして、時にはまるで一つの人格を持った独自の登場人物のようになる。つまり gossip が躍動する outer circle を背景にすることによって inner circle に客観的光を与

え、主人公の持つジレンマに方向性を与えるのである。

しかし George Eliot は、「*Middlemarch* を執筆する時まで、*Middlemarch* のような主題を持った小説と gossip との関係についての新しい見解に到達していた」と言われるように、*Middlemarch* における gossip の取り扱い方は、従来のものとはまた少し異なり、そこでは gossip にさらに重要な役割が加味されているのである。つまり *Middlemarch* 以前の、それぞれの主人公の名前が付された *Adam Bede*, *Silas Marner*, *Romola*, それに *Felix Holt* の小説が、どちらかというジレンマに悩む主人公、inner circle に主として焦点が当てられ outer circle はどうしても二義的な役割を果すに過ぎなかったのであるのに対して、*Middlemarch* では、その表題が一地方都市の個有名詞となっていることからもおおよそ推察できるように、outer circle は単に小説の背景としてあるのではなく、*Middlemarch* という町は gossip という形態を通して生き生きとした人格を持ち、道徳的ジレンマに陥った inner circle に恐いかかる。*Adam Bede* も *Felix* も *Silas* も、もろもろの苦難はあったものの、結果的には求める人生を手に入れることができたのに対して *Middlemarch* の二人の主人公ともいうべき *Dorothea* と *Lydgate* の抱いていた高遠な理想は結局達成できなかったものであって、outer circle である *Middlemarch* は gossip という形態をとって特に *Lydgate* に対して厳しく向き合い、遂には彼をその町から追い立てたのである。つまり *Middlemarchers* の間の gossip は彼らの道徳的規範を形成し、そして結束するための code となり、それを犯す者は決して許さないという、極めて強い性格を持ったものであった。

*Middlemarch* が commercial city であり、世俗的欲望の強い社会であったために、gossip は当然その地域の住民の体質を反映し、金銭的問題や地位階級といったものの核を持ちやすい。それに古い地方都市に住む住民が持つ特有の自尊心、誇り、それからそういうもののにのっとった強い道徳的意識が彼らの gossip には加味される。茫大な長さのこの *Middlemarch* の小説の二つの大きなテーマである *Dorothea* の人生の挫折と *Lydgate* の人生の挫折のうち、当学紀要 18号から20号までの筆者の論文で明かにされているように、*Dorothea* の人生の挫折が *Middlemarch* というこの大きな社会との直接的な確執の中に於て行なわれたものではなく、そのため町自身がそれほど強い力でその挫折に作用した訳ではなかったものであったが、*Lydgate* の理想はあくまで医師としての職業上のものであり、*Middlemarch* の町に緊密に結びついたものであったために、その町の gossip の威力を全身に受けたのは当然のことであった。

Rosemarie Bodenheimer は彼の著書である *Mary Ann Evans* <sup>(10)</sup> の中で *Middlemarch* の gossip の特性について次のように解説する。

gossip も scandal も *Middlemarch* では真実、つまり主体となる者たちが容認するような真実ではなく、彼らが恐れさげすんで抑圧してきた真実、を語るものである。…真の gossip は、証拠がないところから結論を導き出すような興味本位の満足のいく幻想やあてこすりなどを、多分に含んだ話として定義されることができ、そしてまた、それは不信感や嫉妬や嫌悪感などからも引き起こされる。……

*Middlemarch* 中の gossip は常に抑制された真実の外面化となるのである。<sup>(11)</sup>

つまり *Middlemarch* の住民 *Bambridge* 氏が旅先で *Ruffles* に会い *Bulstrode* の過去の醜聞

をきき、それを Middlemarch の人々に話した時に、もはやすでにその Ruffles が Bulstrode の別邸で死んだということと、Lydgate の多額の借金の返さいが Bulstrode から出た金でまかなわれたという二つの事実がそこに存在し、それらが総合され、Bulstrode が Ruffles の死を願い Lydgate に渡した金が Ruffles を死に導くためのわいろではなかったかという scandal , gossip が生まれたのであった。そしてそれら gossip や scandal の核にあるものは、あくまで憶測であり、何ら証拠はないのである。でもその憶測は *Middlemarch* においては depressed truth (抑圧された真実) なのであった。それゆえにこの gossip や scandal の本源であるそれら一連の事件は事件性をより強めたのである。この事件が *Middlemarch* にどれだけの衝撃を与えるものであったかについて George Eliot は次のように語っている。

この事件はとても社会的な事件であり、かつまた重要なものであったので、その興味を満足させるために晩餐会を催す必要があった。それで、この Bulstrode と Lydgate の間にまつわる scandal に勢いを得て多くの人たちが食事に招いたり招かれたりしたのである。妻たちや未亡人たち、それに独身の女性たちも手仕事を持っては、いつもよりもしばしばお茶によばれていったのであった。Green Dragon から Dorop の店にいたるすべての公共の酒の席における興味は、上院が選挙法改正法案を否決するかどうかという問題に向けられる興味の比ではなかった。<sup>(12)</sup>

## 11

すなわちそれまでに *Middlemarch* にひたひたと浸透していた Bulstrode に対する得体の知れない嫌悪感とそれに連なる Lydgate の、改革的な医学に対する町の人々の異和感、嫌悪感、それからまたその町の人々の厳しい道徳意識は、彼ら二人を糾弾すべき隙をいまかいまかとねらっていたのである。そしてそれは Ruffles の死に立ち会った Bulstrode と Lydgate の関わりについて憶測に憶測を重ねることによって一般的な結論を導き出し、自らを満足させたのである。四人もの医師を交えて、町の人々は、Lydgate が書いた死亡証明書と Bulstrode の別邸の家政婦から聞き出した Ruffles の死亡時の様子などを詳しく検討した結果、Lydgate の医学的処置については、「疑惑の積極的な根拠になりうべき特別な問題は見当らない」という結論にいたったものの、道徳的見地から見た場合の Bulstrode と Lydgate の行為の正当性に対しては多くの疑いを残していた。つまり、*Middlemarch* の人々が Bulstrode と Lydgate に対して抱いた道徳的な疑いは次のようなものであったのである。

Bulstrode には明かに Ruffles を除きたいという強い動機があったのだし、この折も折、彼は現実 Lydgate に援助を与えたのだ。そして彼は Lydgate がその援助を必要としていることをしばらく前から知っていたに違いないのだ。それからさらに、Bulstrode の性格ではそのような破廉恥なこともしかねないと思われたし、Lydgate についても、どんなにどうまんな人でも金に窮すれば容易にわいろを受け取るもので、彼もそうであったかもしれないと信じないわけにはいかなかった。<sup>(12)</sup>そしてそのような、単なる疑いから生じた gossip や scandal はまた次のような性格を帯びていくのである。

その罪が確定できないものであるものの、その罪があったという漠然とした確信は強く、先輩の有力

な医師たちですら、けしからんことだと頭をふり、痛烈な皮肉をいうのをやめなかったのであるから、一般の人々はましてや真実の上におおいかぶさっている神秘の威力を存分に感じたのであった。誰もが単純に事実を知るよりも、その事がどんなふうであったかと推量することの方をより好ましく思った。というのは推量はたちまち知識よりもなお強い確信を帯びたからであり、矛盾したことがらでもより寛大に容認したからである。Bulstrode のはるか昔の生活に関した極めて明確な醜聞でさえ、ある人々には、溶け出して神秘の渦になり、どろどろに溶けた金属のように会話の中に流しこまれて、天が気に入るようなとんでもない形になってしまうのである。

そしてその gossip, scandal はいよいよ、実力を行使する。

「…町のおえら方は、心をつにして Bulstrode を町から追い出そうといっているのだそうだ。

Thesiger 牧師は彼の敵方になり、自分の教区から彼を追い出したがっているんだ。それにこの町の紳士たちは、みんな、彼と食事するくらいなら、むしろ牢獄船から出てきた人と食事した方がいいと言っている。」

Lydgate に Bulstrode から渡された金がいらいらであったかどうかということ、つまり、Lydgate の、Ruffles へのかかわり方への疑いは、Ruffles の死骸を掘り出そうという案まで飛び出したが、それに対して酒場 Tankerd のおかみは、次のように言う。

「…あの医者は飲む前も飲んでしまっても、においもかげないし見ることもできないような薬を知っているに違いないよ。…ただ一つ言えることは、この Lydgate 先生なる人を私たちのクラブの顧問の医者にしないでよかったということさ。もしそうしていたら多くの子供たちがどうなっていたか知れやしない。」

Lydgate についてはまだこの時点では疑いから強い警戒心が芽ばえただけで、Bulstrode のように町からの追放運動が起るほどまでには到っていない。しかし、当の Bulstrode も Lydgate も、このような gossip や scandal が町のいたるところに流布していることに全く気がついてはいない。Bulstrode にいたっては、Ruffles の死に対して「摂理によって救われたのだと感じ」、罪の意識は全く持っていない。彼らが知らない間に強力な勢力を備えていたそれらの gossip, scandal の威力を彼らが初めて感じたのは、町にコレラの患者が出たために、公会堂 (Town Hall) において衛生問題に関する会議が、医者などの医療関係者や Bulstrode を含めた町の名だたる人々を構成メンバーとする評議会が開かれた時である。

メンバーの中の一人である Hawley 氏がまず会議の冒頭において、Ruffles を発信源とする Bulstrode の gossip の全容を町のお歴々の前で披露し、Bulstrode にその釈明を求めたのであった。彼は honest man でありかつ gentleman であることを誇る町の人々の道徳的基準から Bulstrode を弾劾したのである。Bulstrode 自身それまではこれらの町々の道徳的基準に加えて独得な禁欲的宗教を持つ者として町の人々の陣頭に立ってきたのであった。しかしこの場に及んで彼のその道徳は自らを裁くことになったのである。Bulstrode は、世俗的性格の強い Middlemarch の人々が決してまねのできないその禁欲的宗教を盾に一応は応戦することはするが、その gossip に対して身の潔白を証することができない限り、彼の議論は強い説得力を持つことはできない。そのような Bulstrode に対して、それまではただ一人 Bulstrode を支持して



きた、その会の議長である Thesiger 牧師の、退場を勧める説得で Bulstrode はついに退場し、Middlemarch に対して事実上、自分の過去に犯した道徳的な罪の一切を認めたのである。そして初めて Bulstrode は、自分の人生が失敗であったことを知ったのであった。

一人で歩いて会場を去る力も気力も失せてしまった Bulstrode に手を貸して共に会場を出ることになったのは必然的に隣りに座り合わせていた Lydgate であった。Lydgate はその時初めて Bulstrode と Ruffles との関係を知り、Bulstrode が気前よく自分に貸してくれたあの千ポンドがわいろであって、Ruffles の死が Bulstrode のよこしまな動機によって何らかの手心加えられたことを確信したのである。そして Bulstrode に手を貸して共に会場を去ることが、自分と Bulstrode との間のこの関係を公然と認める行為であることも確信した。しかしそうせざるをえなかったのは、Bulstrode の主治医としての Lydgate の立場であったであろう。そして町の人々はあの金がわいろであったと信じ、また彼らは Lydgate 本人もそれがわいろであると知りながらその金を受けとったのであると信じているに違いないという思い等々が Lydgate の心を一度に襲ったのである。

つまり Ruffles によって Middlemarch に伝えられた Bulstrode の scandal は、Ruffles の死によって今度は Bulstrode と Lydgate の間の関係を核にしたより真刻な scandal を生み出したのであったが、Bulstrode 個人の過去にまつわる scandal についてはかなり確証があったものの、Bulstrode-Lydgate の scandal については、あくまで町の人々の彼らの行為の中にそれを起させる動機があつてしかるべきだという前提の下にたつた憶測や推量によるものであつて追求の動力を持ちえないものであったために、評議会における Hawley 氏の先の発言はまずは Bulstrode 個人に限定された scandal の真相に迫つたのである。ところがその Hawley 氏の追及は Bulstrode 個人の scandal の真実を明かにしたばかりか、Bulstrode-Lydgate の scandal についても期せずしてその評議会の面々の前で公然と肯定しているかのような事態を引き起こしてしまったのであった。それまでは町の巷でささやかれていた gossip はとうとう明かすみに出され Bulstrode 事件、Bulstrode-Lydgate 事件となり、それまで gossip や scandal にうとい地主階級や牧師たちにまで衝撃を与えるものとなったのである。

すっかり混乱した Lydgate の心がやがて行きついたことは、自分は受難者であり他の者は自分を傷つけるために存在していたのだという思いであった。そして自分の高遠なる理想を挫折させたその迫害者の第一人者は妻の Rosamond であると思う。Lydgate が自分では耳にするのにも恐しく思っている「わいろ」という嫌疑をかけられるにいたつた災難のそもそもの発端は Rosamond との結婚にあつたのであり、Lydgate は、その時初めて自分たちの結婚は徹頭徹尾失敗であったことを確認する。ともあれ、当論文の 9 章でも述べたように、Bulstrode から千ポンドを借りた次点では Lydgate は Ruffles の正体を知らなかったのであり、その金がわいろであると知りながら受け取ったのではないことはきっぱりと申し開きをすることはできても、結果としてその千ポンドが Ruffles の死に際して医者としての彼の立場をきわめてあいまいにし、そして彼の科学的良心を貫く目を曇らせたのであったことを Lydgate は認めざるをえなかったのであり、自分の身にふりかかったその嫌疑に対して全くの無罪を主張することはきわ

めて困難であることを悟ったのであった。またそれにもまして困難だったのは、Middlemarch の人々の中に一たん形成された偏見を言葉によって矯正することであった。その町では特に「状況はいつの場合でも彼の証言より強いものであった」のであり、その機に臨んで、Lydgate がかつてその人格を高く評価していた Farebrother 牧師でさえ、彼ら Middlemarch の人々の偏見に強く毒されるその性格と無縁ではなく、Lydgate のことを弁護するなどということはもちろんのこと、友人 Lydgate の側に立って Bulstrode-Lydgate 事件に介入することすら拒否したのであり、さらには妻の Rosamond ですら夫のわいろ事件の噂について知るに及ぶや夫への不信感を募らせ Lydgate が真実を語る言葉に対して聞く耳を持たない。

つまり Lydgate の立場は今や、Lydgate 自身が分析しているように「Bulstrode の品性に取りこまれ」てしまっていて、自分が「以前から人にどう思われていたかがすべてを決める」という消極的かつ受動的なもの以外の何物でもなかったのであった。<sup>(14)</sup>

そのような Middlemarch の人々の狭量な思考様式に毒されていない者として Dorothea が登場する。Dorothea は Lydgate のわいろの嫌疑について聞いた瞬間から Lydgate の無実を信じて疑わない。もともと Dorothea の考え方の基本は世俗を超越し善のみ見ようとするものではあったが、Lydgate は Dorothea にとって夫 Casaubon の主治医でありまたおじの Brooke 氏が後援してこの地に來た、理想を抱いた若き医者であって、その性格をある程度知った者として Dorothea は、Middlemarch の人々の中でも俗事に対しては比較的寛大であった Chettam 氏や Farebrother 牧師などまでも口裏を合わせてその問題に介入することを制止する中で、そのような狭量な考え方の人たちをもものとししないで、Lydgate を信じる気持を変えようとはせず、そしてそれを行為に移したのである。この時点で一つの噂への Middlemarch の人々の対し方と、生粋のその町の人ではない者の対し方との対比がなされるのを見るのである。Dorothea はいつも「人はたいていの場合、隣人たちが考えるほど悪いものではない」と思っている。<sup>(15)</sup> Dorothea は、正義と慈悲のための努力を信ずべき牧師なのに、かつてはお互いに深く信頼し合っていたかにみえた友人なのに、用心深く結果のみを考えて Lydgate のために何の働きかけもしようとしない Farebrother 牧師に対して初めて不満を抱く。これは Lydgate の心にもまっ先に浮かんた不満でもあった。そしてこの Farebrother 牧師の考え方身の処し方が、そもそも Middlemarch 流の流儀であったのである。

Chettam 氏は Dorothea が Lydgate の身の証しをたてる手伝いをしようとした時、「彼は自分自身、潔白を証明できるのなら、きっとやるだろう。そういうことは自分自身でやるべきだ」と言うが、Farebrother 牧師までがこのようにかたくなに Lydgate の弁護を拒否している。<sup>(16)</sup> 言葉での潔白の証明が無理であるとすれば、Lydgate が自分の嫌疑を払拭する方法は Bulstrode から借りた一千ポンドを全額返済するより他にはなかった。それを実行に移させたのは、Lydgate から事の真相をきき彼の潔白を確認した Dorothea であったのである。そのようにして Middlemarchers の中に沸き上がった Lydgate の scandal は一応晴れたとはいえ、次の章の中にある Vincy 氏の言葉からもわかるように、Middlemarch では一たん生まれた噂はその無

実が証明されるやすぐに消えるというのではなく、「世間体には罪を犯していようといなかろうと同じ」だったのである。つまり Middlemarchers の中においては、その scandal の中にどんな真実が隠されているかということよりも、それが生み出されるに至った条件それ自身が、もはや糾弾されるべき重大事なのであった。とすれば前代未聞の恥辱に満ちた Bulstrode との scandal に巻き込まれた Lydgate が、清廉潔白を殊の他重んじる Middlemarch の人々の中でどうして医師としての信頼を勝ちえようか。結局 Lydgate は Middlemarch に来た目的である高遠な研究をあきらめ、彼の人生の行く手に確かに見えていた Jenner (Edward Jenner. 1749—1823, イギリスの医師, 種痘法の発見者) も Bichat (Marie Francois Xavier Bichat. 1771—1802, フランスの解剖学者, 組織病理学を起した) ももはやかき消されて、Rosamond の物欲を満足させるために Middlemarch を去り、London に出る決意を余儀なくされたのであった。この結末は裏返せば Rosamond に対する Lydgate の敗北であり、それはまたよそ者である Lydgate の Middlemarch に対する敗北であり、ひいては Lydgate の人生の敗北でもあったのである。つまり Lydgate の人生の高遠な理想は、Middlemarch という commercial society を支配する物欲によって挫折に導かれたということができるであろう。

## 12

Lydgate の運命とは少しそれるが、ここで少し Bulstrode の妻, Harriet の高貴な人柄について述べ、更に Middlemarch の小説の研究の総体としての結論を述べておこう。Harriet は、Middlemarch における代々の工場主 Vincy 家出身で、町内きっての社交好きである Vincy 氏の妹である。Vincy 家の者の持つ派手な暮らしを好む傾向はいくらかあるものの、夫 Bulstrode の性格とはおよそかけ離れた正直で率直な人柄は、男女をとらず町の人々から好感を持たれていたのであった。つまり Bulstrode とは生理的には全く異なる女性であったのである。金の力で権力を持ちそれによって町における一応の地位を得てはいるが、その実誰一人として心から彼を信頼し敬う者がいなかった Bulstrode が、したがってこの妻 Harriet の曇りのない自分への信頼と尊敬を失なうことを何より恐れていたのはもっともなことであろう。それで Bulstrode は20年以上前のその悪業の権化として現われた Ruffles を、Harriet の目から極力遠ざける工夫をし、とうとう Ruffles の死まで妻の目をごまかすことに成功したのであった。そのため Ruffles が町の住民 Bambridge 氏や Garth 氏にあげた Bulstrode の過去のその悪業の数々はもちろんのこと、もはや町の誰もが知り gossip, scandal の旋風を巻き起こしている Ruffles の死の際の夫から Lydgate へのいろいろ問題についても全く知るすべがなかったのである。

しかし夫がコレラに対する町の衛生問題を協議する会議で倒れて以来、自室に引きこもり床につき深く悩み苦しんでいる様子から Harriet は次第に不安を感じ始める。この不安は一度だけ会ったことのある Ruffles の印象と不思議に結びついたものであった。思い余って Harriet は町に出かけ友人を訪ねる。そして彼女は夫の現在置かれている状況をすっかり知るまでに三人の人をわたり歩くことになるのである。彼女がその真実を知っていく過程において見られる

Middlemarch の人々の gossip に対する対し方のもう一つの特徴は、女性たち、つまり妻たちの中において見られる特異な現象であった。George Eliot は当時の Middlemarch の女性たちの互いの中にある意識について次のように述べている。

考えることもない暇な女性たちは、彼らの隣人について何か嘆かわしい不評がたつと急に思いを巡らせて、いろいろな道徳的衝動が起こり、それを口に出さざるをえなくなりがちである。虚心担懐というのもその一つの現われである。率直な人であるということは、Middlemarch 流の語法からすれば、早い機会に、友人たちの能力や彼らの行為や立場を快く思っていないということを彼らに知らせることを意味するのである。……。それからまた、真実を知ることを受する気持というものもある——この言い回しの意味は広いが、当面の意味においては、夫の性格が不評であるのに妻がとても幸せそうにしていたり、自分の運命に至上の幸せを感じたりしているそぶりを見ることへの強い反ばつであった。……。とりわけ強いのは、友人の道徳的意識を向上させてやろうという配慮であった。<sup>06</sup>

つまりその町の妻たちは徳義心 (moral) という大義名文の下に、夫の gossip や scandal を知らない妻にそれを告げるというおせっかいをやかざるをえない性格を共通して持っていたのであった。それでまず Harriet が訪ねた Hackbutt 夫人は、

二階の窓から Bulstrode 夫人が家の方に向かってるのが見えた。すると Bulstrode 夫人には会わないようにしなければと以前思っていた警告が思い出されてきて、ここは断固として居留守を使わねばならないと思った。でもまたそれに反して、自分の心にあるものをほんのちょっとでもほのめかすことのないようにと固く決意して彼女に会うことの、はらはらどきどきする感じをどうしても味わいたいという強い願望が心の中にわいたのである。<sup>06</sup>

しかし実際に Harriet に会うと Hackbutt 夫人は、「もし私の忠告をきき入れて下さるのなら、御主人と別れてしまいなさいよ」と言いたくてたまらなくなかった。実際にはそれは言わなかったが、彼女の言葉の背後に恐ろしいものが隠されているような様子を感じとった Harriet は、Hackbutt 夫人の家を早々に引きあげたのである。つまり Hackbutt 夫人によって何かはわからないがとにかく恐ろしい事実の間口に引きこまれて Harriet は、気持を少し整える時間を持ったあと、今度は Harriet が一番の親友と考えている Plymdale 夫人を訪ね、その恐怖の事実にもう一步踏み込んだのであった。つまり憐れみに満ちた同情で Harriet に接した Plymdale 夫人の様子に Harriet は、自分の想像を絶する重大なことが夫の身に起こったことを直感し、いたたまれず、それが何かということをもたしても問いただすことができないまま、Plymdale 夫人の家を辞し兄 Vincy 氏の工場へと向かうのである。Vincy 氏は Harriet にその gossip や scandal のすべてを話し、そして次のように言う。

町の人々はいろいろ取りざたするであろう。たとえ裁判で無罪だったとしても人の噂は続くだろう。うなづき合ったり目くばせしたりもするであろう。世間体には、罪を犯していようといなかろうと同じことであるっていうのはよくあることだよ。全くふんだりけったりさ。それは Bulstrode ばかりか Lydgate も同じめに合うってことだ。ほんとうのことは何か。わたしにもわからない。私はただただ、Bulstrode っていう名前も Lydgate っていう名前もきかなければよかったと思うだけだよ。おまえは生涯 Vincy でいた方がよかった。Rosamond もそうだよ。<sup>06</sup>

つまりはえぬきの Middlemarcher である Vincy 氏が最も恐れているものは、Bulstrode や Lydgate に向けられた疑いが無実であるかどうかということよりも、むしろそのような gossip や scandal を生み出してしまった義弟と義息の状況にあったのである。実際、その gossip や scandal の核にあるところの、Bulstrode が義理の娘である Ladislav の母に Dunkirk 氏の遺産が渡らないように画策したということや、また Ruffles の死を医師 Lydgate にわいろを渡すことによって速めたというこの二つのことは、もはやその本人がこの世にはいないために真偽のほどをすっきりと Middlemarch の人の前に明らかにすることはできないのである。それだけによけいに gossip や scandal が横行するにまかせておかざるをえないのであって当事者はいやが上にもますます窮地に追い込まれることになるのである。そのことは、Middlemarch における彼らの人生はもはや否定され、他の地での生活を余儀なくされることを意味するものであった。Middlemarch における gossip, scandal の力の恐しさは認識してはいたものの、その gossip, scandal の核にある夫の秘密の全容を知った Harriet は、もはや一人で立っていることはできず、兄に助けられて帰路の馬車に乗り込んだのであった。まっ先に彼女の心に芽ばえた感情は、彼らの結婚生活の20年の間、彼女に秘密を隠してきた夫への憎悪であり、その不面目を夫と共にしのんでいかなければならないこれからの人生へのこらえがたさであった。しかしその彼女が夫を許し「悲しいことですがとがめはいたしません」という気にさせたのは、彼女のほとんど半生にわたって幸運を共有させてくれた人、いつも変わることなく彼女を大切にいたわってくれた人への忠実な魂であった。彼女の生活のすべての喜びと誇りに泣きながら別れを告げ、とうとう Harriet は屈辱を受け入れる新しい生活を始める覚悟をしたのである。Bulstrode は噂が知れたあかつきには妻からさえも同情されることもなく、不幸のまま死んでいかなければならないのではないかというような孤独感と戦っていたのであったが、Bulstrode にとっては神よりも誰よりも救われたいと願っていたその妻によって遂に救われたのである。

Middlemarch の小説の中には多くの人の人生模様が描かれてはいるものの、自らの道徳的な罪によって悲運を招いた者は Bulstrode 一人である。しかし彼の運命は、同じように道徳上の罪を犯した *Adam Bede* の Hetty や *Felix Holt* の Transome 夫人や、また *Mill on the Floss* の Maggie がたどった運命のように出口の見えない孤独の中でもがき苦しむものとは大分異なっている。結局 Bulstrode は Middlemarch を去ることになるにはなるが、そういった悲運でさえ愛情と信頼で結ばれている妻と共に堪え忍ぶのであれば、その悲しみは大いに軽減されるというものである。Middlemarch を読んでその町の人々の gossip や scandal をもてあそぶそのしつこさにへきえきすることはあるけれども、上に記した他の George Eliot の作品の悲劇のヒロインに感じる暗たんたる感じを抱かないのは、Bulstrode にかぎらず Middlemarch のヒーローヒロインたちは一たんは今まで見てきたような息のつまるような八方ふさがりの窮地に陥ったとしても結局は出口を見つけてそれなりの人生を全うすることができたのだし、Casaubon の悲劇的人生は気になるものの、*Adam Bede* の Hetty や *Felix Holt* の Transome 夫人、*The Mill on the Floss* の Maggie などのように、完全に神に見離された者が

いないからであろう。George Eliot は自分の小説の中において登場人物に悲劇を招来させるのは、Shakespeare 劇と同様に彼らの過去において大なり小なり何らかの罪と認められる行為があったためであり、悲劇はその行為に対する Nemesis であると言っているが、*Middlemarch* においてこの Nemesis の力、つまりその過去の罪に対する報復としての悲劇的要素が緩和されているのは、*Middlemarch* が作者が52歳の時の執筆であり、神への懷疑のために最後まで最愛の父親と和解できなかった若き日のその不孝や、自らの反道徳的な結婚などからくる罪の意識がやや薄らいできた、作者自身の思考様式の推移の表われではなかろうか。

注

- (1) MDM Chap. 62
- (2) 上田女子短期大学紀要23号（1999年4月刊）
- (3) MDM Chap. 69
- (4) MDM Chap. 70
- (5) MDM Chap. 71
- (6) 作者も筆舌に尽くしがたいと明言するほどの美貌の持ち主であるために人一倍虚栄心の高い農民の娘 Hetty Sorrel は高い身分に憧れ、地主の息子 Arthur のたわむれの恋に落ちる。そして身ごもった Arthur の子を殺し流刑に処せられる。
- (7) 美貌でないことにコンプレックスはあるが深い知性の輝きを持つ Maggie が仲良しのいとこの Lucy のいいなづけである Stephen との恋に落ちる。
- (8) *The English Novel* (Walter Allen, Penguin Books p.221においてJoan Bennett が著書 *George Eliot : Her Mind and Art* の中で述べている記述の引用)
- (9) George Eliot の最初の小説 1856年作者37歳の時第一篇『Amos Barton 師の不幸』脱稿
- (10) *The Real Life of Mary Ann Evans, George Eliot, Her Letters and Fiction* (by Rosemarie Bodenheimer, Cornell University Press, 1995) p.151

By the time she wrote *Middlemarch*, she had also come to a new understanding of the relationship between gossip and the self comforting fictions of it's subjects.

- (11) 同上 p.151, 152, 153

More important, both gossip and scandal tell the truth in *Middlemarch* — not the truth their subjects acknowledge but a kind of truth they have fearfully or scornfully repressed. . . . it is clear that true gossip might be defined as talk laden with titillating fantasy or innuendo that draws conclusions from a lack of evidence and arises from distrust, jealousy, or hostility, . . . For gossip of in *Middlemarch* is always the externalization of a repressed truth.

- (12) MDM Chap. 71
- (13) MDM Chap. 73
- (14) MDM Chap. 76

- (15) MDM Chap. 72
- (16) MDM Chap. 74
- (17) ギリシャ神話で人間の思い上がりに対する神の憤りと罪とを擬人化した女神

#### 参考文献

- (1) *Adam Bede* by George Eliot, Collins London and Glasgow, 1963
- (2) *Felix Holt, the Radical* by George Eliot, Everymans Library 353
- (3) *Scenes of Clerical Life* by George Eliot, Penguin Classics
- (4) *Othello* by Shakespeare, The Arden Shakespeare, Methuen & Co. LTD, London
- (5) *Antony and Cleopatra* by William Shakespeare, 篠崎書林, 昭和39年3月
- (6) *Hamlet* by Shakespeare, 篠崎書林, 昭和40年4月
- (7) *Macbeth* by Shakespeare, The Arden Shakespeare, Methuen & Co, LTD, London
- (8) Shogakukan Random House English Japanese Dictionary
- (9) *Local Habitations, Regionalism in the Early Novels of George Eliot* by Henry Auster, Harvard University Press Cambridge, Massachusetts, 1970